

京町家の保存

--この京都独特の建築の過去の歴史・未来へのプラン・そして現代の意識--

諏訪幸子
修士課程

人間文化研究科
応用英語学科
京都ノートルダム大学院

2006

Introduction

対面調査の共同研究者、イギリス人メラーは彼女の小論文「現代家屋の空間使用に残る日本独自の文化の継承」の始めで、結果がどうであろうとも日本の人々は“it can't be helped,”「しかたがない」というだろうと述べている。変わる事へのすなおな受容は日本独特の発想であると言えるのだろうか。

その底には「無常観」や「諦観」といった古来からの価値観があると思う。有名な平家物語(1220 頃発生)の冒頭の歌はだれもが学校で学び、知っているものであるけれど、なにものも留まらず流転する事がうたわれている。一夜の夢、風の前の塵とモノの存在を歌うが、この歌が歌われる前から、京都の商人の住居としての京町家は存在している。道端での商売を発生とする家屋構造は外の要素を中へ取り込み、今日にいたるまで完全な自然素材で作られており、再生が簡単で庭を含む自然とのバランスを基本とし、長い時を超えて都心部で存在し続けた家屋様式となっている。

不思議で個性的な要素として、台所の布袋さんから、玄関のお札、仏壇、神棚、床の間、鬼門、棟上げ札、屋根の鍾旭さん等、生活に密着した自然信仰と呼べるようなものを現代もその構造に持っており、神社のお札などは田の字地区といわれる洛中の生活にいまだ深く関わっている。

この論文は、中心に「光泉洞」という実際の洛中、中京区姉小路の京町家を中心に述べてゆく。これは、間口3間奥行き5間といわれる店舗を持つ本来の町屋であり、かつて「チョーヤ」と呼ばれていた事もある典型的な京町家建築様式だ。明治初期に内戦の大火により京都の中心部が消失し、第二次世界大戦で6大都市の中心部全てが京都を例外として焼夷弾で消失する。日本の都市型木造建築の貴重な例が今残る京町家群だといえる。

年10%が京都市内から消滅していると報告されるこの京町家群の存在が未来にむけて保存が可能かどうかを探る。

京町家の保存に関する考察

--この京都独特の建築の過去の歴史・未来へのプラン・そして現代の意識--

Outline in Japanese

第1章 *Kyo-machiya* の歴史

. 概要

1. 京都と京の意味：漢字の普通名詞「首都」を意味する「京」と「都」が、固有名詞「京都」になる。
2. *Kyo-machiya* の起こり：平安京にさかのぼる。記録としては、平安末期の年中行事絵巻、室町時代の洛中洛外図屏風。

. 歴史

1. 平安時代 keyword: 人工政治都市 左京（洛陽）、右京（長安）の唐風 2 都制、中心地の興亡、大路、小路のスケールの違い
2. 室町時代 keyword: 洛中 町衆自治 戦国 天下
3. 明治維新と近代以降 keyword: 首都機能喪失 大火 第二次世界大戦 経済成長

第2章 京都市の *Kyo-machiya* 保存にかかわるプラン

1. 戦後の背景 keyword: 一般住宅 町家の消滅

2. *Kyo-machiya* 保存の可能性

残る約 8 0 0 0 の町中 *Kyo-machiya* ストック

他都市との比較で、中心地における人口密度の高さ

3. 京都の都市計画

Kyo-machiya に係わる市の 2 つの計画

- ・ 職住共存地区の推進
- ・ 京町家再生プラン

光泉洞の職住一体構造 keywords: 店の間、供まち、駒寄、走り庭、暖簾、看板、うち、そと、

光泉洞の立地における自治組織、その他の地域ネットワー

ク keywords: 神社、お町内、地蔵盆、はんなり会、
4.この章のまとめ：保存への可能性にみちている。

第3章 *Kyo-machiya* 使用者の調査

1. 概略「日本家屋独特の住み方への評価を調べる」

2. 調査

105 質問を 9 カテゴリーでの対面調査

50 人の対象者を年齢別 3 つにグループ分け

ロンドン大学の博士論文作成のジリアン・メラーと著者の共同研究として 2003 年度に 1 年間実地調査.

3. 調査結果

シニア ジュニア ミドルの順番で京町家独特の構造への積極的高評価がみられた。全員が一致して高評価したカテゴリー、シニア ミドル ジュニアと評価が年代により下がってゆき継続の仮定は不可能なカテゴリーもあった。結果として京町家の持つ暮らし方への支持は高く、34 歳以下の支持が 35 歳～54 歳を上回る事から暮らし方の継続が予測される。

第4章 結論

平安時代から、数々の内戦、大火、地震、などの危機を経て、今なお都心部に数多く残り、行政がその保存を具体的な計画に移し始め、人々の意識の中にも深く残るこの日本の京都都心部独特の建築様式は保存される可能性に満ちていると仮説をたてる。

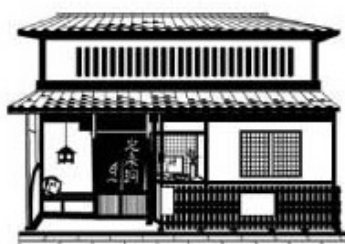
付記資料 A 洛中洛外図屏風全図

B 京図（平安）

C 調査 105 質問一覧

参考資料（本、パンフレット、サイト含む）

- 例)「近世風俗図譜」より「洛中洛外図」林屋辰三郎、小学館
「近世京都町家の形成と展開の過程に関する史的研究」日向進
「京都の町の家としての町家歴史と建築」カリン・ロフグレン：
ストックホルム王立技術研究所
「現代家屋の様式に残る日本独自の文化」ジリアン・メラー：京
都精華大学紀要
「京都市都市計画2005」
「京都市都心部における伝統的木造建築ストックとその特性」
宗田好史：日本建築学会計画系論文集 542
「京図」京都古代文化研究所オンライン
他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・



筆者：諏訪幸子

住所：京都府宇治市南陵町5 - 1 - 10

電話 0774 - 23 - 6126

[メールsuwa9448@wao.or.jp](mailto:suwa9448@wao.or.jp)

Kyo-machiya 光泉洞

京都市中京区姉小路堺町東入南

明治38年5月14日棟上「田中源一郎」棟梁

諏訪1995年取得、改修

小野光 御池通拡幅時取得 改装

乾物屋所有時、3軒続きの「店、本家、隠居宅」の真ん中の建物

Abstract 訳

京都の中心地から毎年「京町家」とよばれる京都独特の建築様式の建物が姿をけしている。

この傾向は、戦後（1945～）著しい。京都市は21世紀になってその保存のプランを打ち出し京町家の持つ13世紀にわたる文化ともども残す方向を探り始めた。今、日本人にとっても不可解といわれる京文化を英語で論じる事によってあきらかにできる事があると信じる。この京町家が生まれた平安時代の京都の文学「源氏物語」が英訳されたとき、その文章の主語があきらかになって、日本人にとってさえわかり易くなるという言語の背景がある。

この論文の目的は京町家の文化の保存への可能性を英語で論じる事にある。論文作成者は京都生まれ京都市育ちで、京都中心地に本格的な京町家を動態保存している。この研究で、京町家の過去、今日、未来を他言語の視点から考察して客観的な答えを見出したいと考える。

京町家の歴史と起こりを第1章で考察する。

京町家の京都市の政策を第2章で論じる。

京町家に住む、働く、または構造を体験的に理解する50人の京都の人々に105の質問をし、統計にかけた調査を第3章で報告し結果を述べる。

この研究論文に手をつけた始めは、著者は京町家の未来は大変な危機的なものであると感じていた。京町家は小さく壊れ易い構造を持ち、木と紙と藁（畳）でできた簡素なものである。しかしながら、その歴史を学び、京都市のプランを調べ、実際京都で暮らす人々の意識を訊ねるうちに、始めの頃の印象は変わっていった。京町家の文化は、実は大変強靱で粘り強いしたたかなものである、という事があきらかになったといえる。

保存は可能である事を第4章で結論とした。

論文は Introduction とメインの 3 章そして Conclusion(第 4 章)で仕上がっています。

その結論の英語に翻訳をつけました。

Conclusion

Kyo-machiya will continue to exist in the future of Kyoto. In the long history of *kyo-machiya*, as detailed in Chapter I, Kyoto has faced many human and natural disasters, and yet we still live with *kyo-machiya* today. In Chapter , we studied current Kyoto City projects to preserve *kyo-machiya*. The city planning office has started to look for possibilities for the preservation of the traditional wooden houses of Kyoto. More powerful than the preservation efforts of the government, however, is the desire by *kyo-machiya* occupants to continue using the traditional structures, a discovery of the survey reported on in Chapter III. Compared to the middle aged group, the younger group expressed more positive attitudes towards traditional usage of *kyo-machiya* space. This shows traditional customs related to *kyo-machiya* will survive into the future.

(結論として) 「京町家」は将来もなくならないだ。1 章で詳細したように「京町家」は京都の長い歴史の中で繰り返し天災、人災にさらされる運命にあった。それにもかかわらず今の時点で私達はその京町家を生活、仕事の場として使っている。2 章では、京都市の京町家保存に関わる政策を調べ、都市計画局はその伝統木造建築物の保存の可能性を模索し始めていることを確認した。しかしながらその行政の保存努力よりもっと心強い結果を第 3 章の京町家の空間使用に関する生活者の「年齢別グループ意識比較」から得る事ができた。調査では京町家独特の生活習慣は若い年齢グループの人々から支持され、未来につながるとの答えに落ち着いている。

Kyo-machiya contains much time-tested wisdom about how to live harmoniously in a crowded, central district of a city. Although Kōsendō is located in an artificial, urban area, it is rich in natural materials and open to small, natural spaces. At the social level, it is connected to a web of

interwoven social networks that create a strong, vital neighborhood community. This paper is an effort to transmit this local, tradition-based information to a wider audience using the current global language, English.

京町家の構造は、都市中心部の人口密集地で人々が調和して平和に暮らすための知恵の積み重ねで生まれたものだ。都市特有の人工的な地域にありながら、光泉洞は豊かな自然素材で作られた建築で、小さいながら自然そのものの空間を内在している。とりまく社会も、たいへん活動的で多面的な地域性を持ち、今もいくつもの組織に組みこまれている。この論文では、日本の伝統にもとづいたこういった地域の建物の現状とそれにまつわる情報を英語言語により発信し、より広く英語圏の人々にも届く事を試みている。

The effort to preserve *kyo-machiya* is like a kind of long distance relay race that must be run over generations. However, from the results of the research conducted for this thesis, it can be reported that there is a strong possibility that *kyo-machiya* traditions will be passed to the future.

いふなれば、「京町家」の保存という作業は世代を超えておこなわれる長距離リレーのようなものだ。そして、この論文の調査結果は京町家の伝統というバトンは未来に受け継がれる可能性が大きいと結論づけている。

Kyo-machiya have two aspects – as software and as hardware. The software is Kyoto lifestyle and culture of Kyoto. The hardware is the structure itself. The structure contains a lot of information about our lives. *Kyo-machiya* has transmitted information for city living in this ancient capital for 1200 years. *Kyo-machiya* contain within them centuries of wisdom on how to live in harmony in a city. I tried to write this thesis English in the hope of transmitting *kyo-machiya* culture around the world, for information sharing is one way to preserve *kyo-machiya* culture for the future.

「京町家」は、建物としてのハードウェアの側面と情報と

してのソフトウェアの側面とを持っている。ソフトは、京都の生活様式であり京都文化。ハードは構造体としての家。そしてその構造体は我々の暮らし方と密接な関係を持つ。京町家は1200年を超える古代首都の都市圏の暮らし方を情報として現代に伝え続けている。世紀を超える知恵は、京町家の構造の中に人々が都市で調和して暮らす暮らし方を示唆し物語っている。私はそのソフトウェアに関わる部分を表現し英語のデジタルな情報（テキストとイメージ）にする事で世界の人々とこの知恵（情報）を共有できるのではないかと考え、そしてその共有も京町屋保存の一つ的手段ではないかと信じている。世界の向こうの「あるコンピューター」の中に保存される情報としての「ある京町家」ファイルも未来における京町家保存の可能性の一つではないだろうか。

諏訪幸子 suwa9448@wao.or.jp